

## 聖語蔵五月一日経の筆者と書写年代その他（一）

松 本 包 夫

まえがき

光明皇后が亡父母のために発願された一切経——いわゆる五月一日経は、約一千巻の現存品の八割に近い七五〇巻が正倉院の聖語蔵に残っている。造巻形式は、紙本墨書、卷子装。料紙は白または淡い黄染めの麻紙で、紫檀の撥型軸を付けている。

この一切経の重要な特徴のひとつは、経の巻末紙背に、その経を書写した経生や、それを校合した校生の自筆の識語の認められるものが若干存在することである。それらの識語は、正倉院古文書の経生・校生手実と同様に彼らの給与算出の基礎になるものであるが、造巻の際、軸付けのため、たいてい裁ち落してしまう。したがって、いま巻末紙背に見える識語は、裁ち落しの残存部分である。識語の記しかたは、おおむね最末尾に筆者と書写年月日、ついで一校・二校の校生と校合年月日の順に紙背のなかほどに向って書き加えられて行くため、造巻裁ち落しの際は、肝心の筆者名・書写年月日の部分が失われることが多く、いま残っている巻末識語も、ほとんどは校合関係のもので、筆者らしいものの判

明するのは、わずか四十数巻にすぎない。

もうひとつのこの一切経の特徴は、正倉院文書によってその書写経緯を跡付け得ることであり、それに関する福山敏男博士の一連の研究はつとに有名である。

ところで、わたしはここ三、四年来、業務の余暇に、聖語蔵に現存するこの一切経の識語・筆風と正倉院古文書——主として経生・校生の手実——の記録・筆跡を対照することによって、この一切経の各経巻別筆者と書写年代、校生と校合年代その他付随的事項の検索を行なっていたが、最近、堀池春峰氏や皆川完一氏の新しいこの一切経に関する論考を拝見し、再びこれの研究が新展開しつつあるを知った。そこで、不充分ながらもわたしの調査を、諸氏の今後の研究のなんらかの資助ともなれば——と考えて、とりあえずここに発表することとした。発表の趣旨がそのようななさいであるから、この小文の「各説」は、わたしが調査した経巻のうちから、遺物・文献の照合によって、その筆者と書写年代の確実に判明したと思うもののみをえらんだのであって、資料紹介的性格を濃くし、推論めくものはできるだけ避けてある。しかし、それでも

なおかつ以上のような調査の結果、筆者・書写年代の判明したものは、聖語蔵に現存するものの約三分の一にあたる四十数点、二百数十巻にのぼった。それを「各説」で二回に分けて紹介する。本号に収めたのはその第一回——聖語蔵経巻目録の分類でいえば一号から七〇号までである。ちなみに「各説」の経名の冒頭に冠している数字は聖語蔵経巻目録の配列番号である。

さて、「各説」に先立ち、「各説」中の引用文献との関係上、福山、皆川両氏の論考に添って、この一切経書写の顛末を簡単に記しておこう。

この一切経の書写は、玄昉のもとにあった底本により、開元釈教録を基礎として、皇后宮職の写経所で、天平八年九月から開始され、天平十年末ころには、角寺と中島院で開元釈教録所収の総巻数五〇四八巻中、二二二六巻が書写されていた。ついで天平十一年二月の写経司の啓（大日本古文书第二十四冊の八十二頁、以下、二四の八二のように略する。）によると、その写了巻数は二二一八巻と進んでいた。天平十一年七月以降は新設の東院写一切経所にその事業を移し、翌十二年四月十五日には既写のもの三五三一巻であると、写経司から報告が出されている（七の四八五、四八六）。

残りの書写は約一箇年をおいて天平十三年閏三月から再開された。この年の書写総数の一括報告は正倉院古文書中に発見できないが、同年同月から九月までのあいだの書写進捗状況は、写経行事給銭帳（七の五九八）によって窺い得る。天平十四年は二月から開始し、同年五月まで四箇月間の書写報告が、福寿寺写一切経所の解で報告された（八の六〇、六三）。それ

によると右四箇月間の書写数は二二三巻であった。つづいて同年後半期の業績は、金光明寺写一切経所の解（八の一五五）によって知られ、その数は六月から十一月まで三六一巻であった。

こうして書写をつづけてきた五月一日経は、天平十四年十二月十三日の高屋赤麻呂の検定（二の三二二、三三三）するところ、一二合の櫃に分納してあつて、総数四五六一巻であつたという。しかしそのうちには、

#### 七櫃 大乘経別生并律三百六巻 帙帛四

という言葉もあつて、開元釈教録以外の経らしいものが含まれているようである。この点について皆川完一氏は、開元釈教録に基づく最初期の書写方針が変化しつつあつたらしいとしておられる。天平十五年以降は、あらたに書写が開始された大官一切経と区別するために、従来の五月一日経を宮一切経と呼んでいるが、このころから書写速度はいちじるしく低下し、同年に二六巻（二の三四八、三四九）、翌天平十六年前半に九五巻が書写された（二の三五五、三五七）ていどであつた。それ以後も、天平勝宝年代まで断片的に宮一切経関係の記事は散見されるが、ついに組織立った業績報告は見出せない。これについて皆川氏は、底本入手の困難が原因であらうといっておられる。これが、正倉院古文書に基いた五月一日経の書写経緯の概略である。

以上の概略を通観してもわかるように、正倉院古文書におけるこの一切経関係の記録は、はじめは簡略、おわりは断片的で、その中間期に組

織的総括報告がそろっている。と同時にそれらの報告の具体的内容となる経生・校生らの手実も、当然付随してそのころのものが多くのである。わたしの調査もその性格上遺物の照合対象となる文献の種類は、経巻別の書写事情が最も克明にかつ経生の自筆で記されている手実を中心としたものが多いから、「各説」に採り上げた経巻も、やはりそれに応じて中間期の書写に属するものが大きな分量を占めている。そこで一応、「各説」中に資料として採用した文献のうちから主だった手実継文を列べて、それと前記写経司啓文以下数点の総括報告その他の関係を記し、まえがきを終ることとする。

(イ) 経師手実帳(続々修一九帙所収、七の三〇一〜三七八)

天平十一年七月から同年十二月までの経生手実継文で、ほぼ同じ期間の写経司の告朔帳(続々修三五帙所収、七の二二五〜二三九)および東院写一切経所受物帳(続々修三帙所収、七の二六三〜二七〇)の内容と合致する点が多い。またそのうちには瑜伽師地論、阿毘達磨頌宗論、阿毘達磨順正理論など、現存の五月一日経と識語のうえで合致するものも含んでいて、当時写経司の東院写一切経所で書写していた五月一日経の経生手実集であることとあきらかまで、後出の(ニ)とともに、先掲天平十二年四月十五日の写経司啓の具体的内容を示す。

(ロ) 校生手実帳(続々修二五帙所収、七の三九一〜四〇四)

天平十一年八月から同年十二月までの校生手実継文である。

(ハ) 校生土師真木島校経帳(続々修二五帙所収、七の四〇四〜四一一)

天平十一年八月から同年十二月に至るあいだの、校生土師真木島の校経記録である。

(四) (ハ)の内容に、(イ)と合致するものがしばしば見出される。

(ニ) 経師手実帳(続々修一九帙所収、七の四二三〜四七二)

天平十二年二月から同年四月までの経生手実継文で、「天平十二年経師手実」と記した題箋が付いている。瑜伽師地論、阿毘達磨頌宗論、阿毘達磨順正理論などの書写が引き続き行なわれていて、(イ)のあとを受けていることがわかる。

(ホ) 装潢校生手実帳(続々修二六帙所収、七の四七三〜四八五)

表に「校紙」、裏に「天平十二年校生」と記した題箋が付いている。

(二)と同じ期間内の校生および装潢の手実継文で、その内容もまた、(ニ)と合致するものが多い。

(ク) 経師手実帳(七の五〇三〜五一一)

(ド) 写経勘紙解(二の二八六〜二九六)

(イ) 経師等手実帳(七の五二〇〜五二三)

(リ) 同(七の五二七〜五三三)

(ヌ) 経師手実帳(七の五三〇〜五四一)

(ル) 同(二四の一三〇〜一四三)

(ヘ) 経師等手実帳(七の五八八〜五九八)

(ハ)〜(ヘ)は現在分断して塵芥文書に収めているが、本来はひと続きの経生手実継文であって、天平十三年閏三月から同年十二月までの分が存す

る。そのなかには「写一切経」、「願文」、「文」などの辞句が散見され、あきらかに五月一日経書写の手実であって、前出写経行事給銭帳の具体的内容を示すものである。とともに給銭帳には欠く天平十三年十月以降の日付けのものも含んでいて貴重である。

- (ウ) 田辺当成解(二の二) 九六
- (カ) 校生等手実帳(七の五二八) 五三〇
- (ク) 同 (二四の) 二四八

どれも塵芥文書に収めてある。天平十三年五月、六月の校生手実で、(ウ)(ク)の内容と合致するものがあり、相い表裏をなすものである。

(ク) 写一切経々生校生等手実案帳(続々修一帙所取、八の) 一八、五五、五九

端裏に「始天平十四年二月五日至四月廿九日一切経々生等手実案文」また「自五月一日至卅日一切経干実書」と記してある。この継文に載せている一切経の総書写数は、二月・二八卷、三月・九五卷、四月・五八卷、五月・五二卷、計二三三卷で、前出福寿寺写一切経所解という同期間の一切経書写数と全く一致している。すなわちこの手実継文は、福寿寺写一切経所より発した天平十四年二月から五月までの五月一日経書写報告の簡別内容である。

(シ) 一切経并疏経師等手実案帳(続々修一帙所取、八の七四、一〇七)

「自天平十四年六月一日至十一月卅日一切経々生并装潢校生等案文紙」の端裏書きをもつ。これによってうかがう一切経の月別書写数は、六・七月合一二卷、八月・一一一巻、九月・一二八巻、一〇・

十一月合一一〇巻、計三六一巻であって、前出金光明寺写一切経所解の数と合致し、この継文が右の総括報告の簡別内容であることがわかる。

以上が主な資料である。もちろんこれ以外に引用した記録もあるが、それらは「各説」中で簡々に述べることになるう。

### 各 説

#### 1 阿鵬阿那含経 一卷

卷首欠。用紙三張。卷末紙背につきの識語がある。

「田辺」 「る容」 「三正」 「了」

この経の書写に関係があるらしい手実は、塵芥文書巻二〇にあって、左のとおりである。

志紀久比末呂諸雜経十五卷(麻方) 写了十四局 未写一局

(中略)

大般若経册帙十八(經脱カ) □卷十九 无量義経□

仏為年少比丘説正事三(經脱カ) 貧窮老公経□

灌浄経□ 末羅□ 无垢優婆夷経□

十一月廿九日 「勘人成」 (七の五九一、まきがきのク)

この手実は年代がないが、その前後に継張りしている分が天平十三年のものであるし、かつこの継文の端に

始天平十三年十一月廿八日至十二月廿一日充一切経 合百六十四卷

の文字があつて、天平十三年の手実と判断される。

図版1・2に経の一部と志比久比麻呂のべつな手実(続々修一の一)を対照のためかかげた。経文は謹書、手実は行味を帯び、かつ写真が不明瞭ならみはあるが、概して軽やかに飄転する筆致は共通し、さらに経の「入」「人」と手実の「久」の最終劃の引き、経の「現」のつくりと手実の「見」は書法が全く酷似していることがわかる。同一筆と考えてよいだろう。以上により本経は

筆者・志紀久比麻呂、書写・天平十三年十一月

と判断される。

なお、識語の「田辺□□」は、当時の校生に、田辺当成、田辺道主の二人がある。ただし道主は天平十四年の後半ころからはじめて古文書に名をあらわしているから、ここにいう田辺は、田辺当成であろう。

## 2 沙葛比丘功德経 一卷

巻首欠。用紙四張。識語なし。

これと同じ名の経の書写手実を正倉院古文書に求めると、1号同様塵芥文書巻二〇に

戸令貴解 申受写一切経事 合十五巻

(中略)

沙渴比丘経四枚文 出家経三枚文 阿難七夢経二枚 新歳経□□ 无  
上処経二枚文 十二品生死経二枚文 八師経五枚 木串子経二枚空二  
堅心政意経三枚文 大魚事□□ 「両月合百卅四枚 卅四枚 原」

(天麻丸)  
天平十三年十一月廿九日 「勘人成」

(七の五八九、ま  
えがきのフ)

という記録がある。この手実の末尾近くに載っている「大魚事□□」に該当するらしい大魚事経なるものが一卷、聖語藏に残っていて(12号後述)、図版3・4に見るとおり現存の沙葛比丘功德経と大魚事経は、太細の差はあれ、どちらも硬い縦長の謹書で、筆風全く一致し、同一人の書写であることがわかる。この事実より推して、右の両同名経同時書写のことを載せている戸令貴の手実が現存の両経に係ることは明白であろう。すなわち本経は

筆者・戸令貴、書写・天平十三年十一月

である。

## 4 仏説諫王経 一卷

完存。用紙五張。識語なし。

続々修一九帙所収経師手実帳(まえがきのイ)中に

大日佐安麻呂

受本経三帙 阿含行経一帙用紙四枚  
空一

随願往生経一帙用紙十二枚  
空一

諫王

経一帙用紙  
四枚

(中略)

天平十一年九月七日 「勘人成」  
(七の三二〇)

と記す手実がある。図版に経の部分と右の手実を筆蹟対照のため掲げた(図版5・6)、手実の方は要するにメモだから蕪雑な乱筆であることを念頭において両者を見較べると、細手大ぶりの軽やかな扁平体で一脈

の共通性が感じとられる。なお手実の本経の用紙数が四張で、現存経の五張と合わないのは、後年に願文一張を付加したからである。まえがきに掲げた多くの手実継文中、「文」、「願文」などと、経・願文同時併写の事実を示すものは、天平十三年閏三月書写再開以後の分に限られている。願文の日付けが天平十二年五月一日である以上、それは当然のことであって（天平十二年五月から翌年二月まで一切経の書写はなかった）、それ以前に書写した分は、この諫王経も含めて、十三年閏三月以後に括めて願文のみを書写し、付加したのであろう。以上の事実よりして本経は筆者・大日佐安麻呂、書写・天平十一年九月と判定した。

なお本経は書写後、日ならずして校生にわたされ、土師真木鳥校経帳（まえがきの㊦）に

天平十一年八月廿六日土師真木鳥校経

（中略）

九月（中略）

八日 説罪要行法一卷四枚 又仏説諫王経一卷四枚（下略）（七の四）  
とあって、同年九月八日はやくも校合（初校）が行なわれた。

5 仏説五百弟子自説本起経 一卷

完存。用紙二五張。識語なし。

塵芥文書巻一四の経師手実帳所収葛野安万呂手実に

葛野安万呂請書合十八巻大毗婆沙論第三帙之中 写了十一巻 雑経八巻 未七巻

（中略）

五百弟子自説経廿五文一（中略）

五月廿九日 「勘人成」

（七の五三九、五四〇、まえがきの㊦）

とあるものが、現存経にあたりと考えられる。それは用紙数が手実・現存経とも合致し、かつ現存経の筆蹟（図版7）と、べつな手実からやはり葛野安万呂の書写と考えられる35号如来興顯経（後述）の筆蹟（図版8）を対比すれば、どちらも著しく扁平な速筆で、全く同筆と見えるからである。なおこの手実は年代を記していないが、これにつながる一連の手実中年記を有するものは、悉く天平十三年のものであり、また裏書きに「五月経師等手実天平十三年」の文字が見える。

こうして本経は

筆者・葛野安万呂、書写・天平十三年五月

と考えた。

6 仏説孛経 一卷

完存。用紙二一張 識語は巻末紙背に「誤」と校生識語らしい一部が見えるのみ。

現存経と同名のものの書写手実は、4号の項で述べた手実継文中に存在している。すなわち

志紀人成請経廿巻雑経十巻 広弘明集二帙十巻

写了経十一巻始一卷 未写八巻

（中略）

孛経一卷用廿一（中略）

九月十五日

(三七の三二五、  
三二六)

年代を逸しているが、本継文中年記を有するものはすべて天平十一年で、同じころの一切経書写所関係文書と内容的に合致するものが多い(まえばが)の(1)。

図版に経の一部と志紀人成のべつな手実(図版10・11)を併せ掲げたが、謹粗の差はあれ、堅長で屈折の多い背勢的筆致は共通し、両者が相即関係にあることを示している。すなわち

筆者・志紀人成、書写・天平十一年九月

である。

またこれの校合は、土師真木島校経帳(まえばが)に、天平十一年九月四日、「仏説字経一卷廿一枚」(七の四〇四)と見えている。経生手実の日付けが九月十五日であるに對し、同月四日の校合は矛盾するようだが、前者は九月前半(一日～十五日、)の書写分を十五日付けで括めて記したまでである。従って本経は天平十一年九月早々に書写し、同月四日はやくも初校を終えたと解される。

## 12 大魚事経 一卷

巻首欠。用紙三張。識語なし。

2号沙葛比丘功德経とともに、鹿芥文書卷二〇所収天平十三年十一月経生戸令貴の手実に「大魚事」□□と見えるものである。詳細は2号の項で述べたから省くが、同一人の手実に併記されている二種の経とそれぞれ同名の二巻の現存経が、全く同筆であるという事実より考えて、右

の手実と現存経とが相い照応すると判断せざるを得ない。

筆者・戸令貴、書写・天平十三年十一月

## 14 一切法高王経 一卷

完存。用紙二四張。識語なし。

続々修一帙所収写一切経々生校生等手実案帳(まえばが)中に

葛野安麻呂受経十一卷信力入印経五卷 一切法高王経一卷  
如来興顯経四卷出家沙弥七十二法経一卷

(中略)

如来興顯経第一用十七文一 二卷用廿一 三卷用廿一文一 四卷用廿

二文一 一切法高王経一卷用廿四文一 (中略)

天平十四年三月十九日 「勘人成 読川原」 (八の九、  
一〇の九)

とあるのが、五月一日経関係文書に見える一切法高王経の書写記録である。右の手実に併載している如来興顯経と同名の現存経(35号、後述、図

版8)、やはり同人のべつな手実に掲げられている仏説五百弟子自説本起経と同名の現存経(5号、既述、図版7)、および現存の一切法高王経の筆蹟(図版9)が写真に見るとおりすべて扁平奔放な筆致で共通していることを考えれば、本経が右の手実に掲げているものにあたることは明白となる。用紙数においても彼此合致している。すなわち本経は筆者・葛野安麻呂、書写・天平十四年三月である。

## 19 泥犁経 一卷

巻首欠。用紙一五張。識語なし。

塵芥文書卷二〇(まえがきの(七))の手実中に

雀部島足 請雑經五卷写了三卷 未写二卷 (中略) 泥梨經用十五文一 (中略)

十二月十一日

(七の五九五)

とあるのが、現存經と同じ名の經の五月一日經関係の唯一の書写記録である。本經の筆蹟(図版12)を、雀部島足の識語をもつ51号毘邪婆問經の筆蹟(図版13、後述)と比較すれば、ともにやや暢達さを欠くが細手縦長の峻険尖鋭な健筆で、合致し、現存經が右の手実どおりのものであることが首肯されよう。なお年代は、この手実継文中に「始天平十三年十一月廿八日至十二月廿一日充一切經」うんぬんの文字があり、天平十三年代であることがわかる。すなわち

筆者・雀部島足、書写・天平十三年十二月

である。

### 23 禅秘要經 五卷 卷一(五)

全巻巻首欠。用紙は卷一・二三張、卷二・一六張、卷三・一六張、卷四・一七張、卷五・一七張。みな識語はない。全巻同筆。

いま本經と同名の經の書写記録を五月一日經関係手実に求めると、塵芥文書卷二二に

漢浄万呂受雜經三卷

禅秘要經一卷卅二枚 (中略)

已上三卷經 五月内写了 「読具」

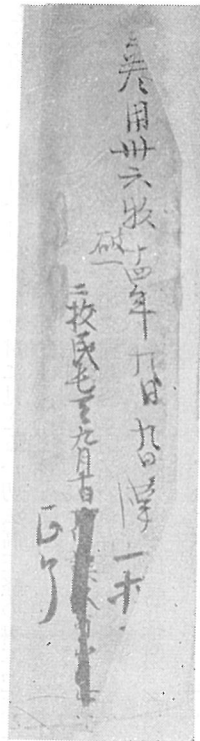
(中略)

天平十三年五月廿九日 「勘人成」

(二四の一三〇、まえがきの(八))

とあるのが唯一のようである。「文一」と願文書写のこともあって、明らかに五月一日經のものである。

この手実によると、筆者は漢浄万呂。図版14・15に現存經(卷二)の部分と、べつに同人の識語(さし図1)がある98号舍利弗阿毘曇非分界



(さし図1)

品卷三(後述)の部分を対照のため掲げた。前者は謹書、後者はやや個性を露わしているが、ともに堅長字体で共通している。現存の五巻はみな同筆だから、うち一巻が右掲手実のものであろう。ただし、現存の各巻はみな巻首を逸してもとの用紙数がわからないし、手実も巻次を記していないから、五巻中のどれに相当するかは判断できない。

すなわち本經は、五巻とも

筆者・漢浄万呂、書写・五巻中一巻は天平十三年五月、他は不明。

### 25 仏説阿闍世王經 一卷 卷上

完存。用紙三一張、識語なし。

本經と同名のものの書写記録は、知恩院蔵正倉院文書断簡につきの一

文がある。

自四月一日至廿九日写一切経

合六十八卷〔七十六〕十卷外写最勝王経〔表〕 見用一千一百卅三枚〔四百八十一〕「五十八卷一切経」  
「八卷外法勒経」

「三百卅九」 吳原生人 写経三卷 用紙八十四枚文一〔世脱九〕 阿闍王経下卷  
「千百卅二寫」

卅四枚 上卷卅一枚  
文一

(中略)

四月十日

(三二〇)

この手実という阿闍世王経上巻は、「文一」と願文を有し、用紙数も現在経と合い、かつ図版17・18に示すように現在経と、べつな手実の吳原生人の自筆は、ともに大ぶり奔放な連筆で、精粗の差こそあれ、同一筆のように見受けられ、現存経が右の手実のものであることは疑いなくろう。

つぎに書写年代だが、手実は四月十日とあるだけで年代がわからな  
い。しかしそのはじめのあたりに「十卷外写最勝王経縹紙」「八卷外法  
勒経」と書き入れがある。これは、まえがき(夕)の天平十四年手実案帳の  
初頭に「都合写経一百九十一卷十卷外写最勝王経縹紙」(八の)とあるもの、  
またそれをうける福寿寺写一切経所の天平十四年前半期の写経報告中に

合奉写経式伯楽拾伍卷

二百卅三卷一切経

卅二卷外写法花経并取勝王経

(八の六〇)

と記すものにあたると思われ、ひいてこの手実の年代も天平十四年と想  
像することができる。(手実の第二行目にいう八卷外法勒経とは、一切  
経中に法勒経なる経名が発見されず、知恩院の現物を見ていないから明  
言できないが、右掲福寿寺の文書にある「外写法花経」にあたるのでは  
あるまいか。)

以上を集約して、本経は

筆者・吳原生人、書写・天平十四年四月

と判定した。

30 過去現在因果経 四卷 卷二・五

全巻巻首欠。用紙は卷二・二三張、卷三・一九張、卷四・一二張、卷  
五・二一張。卷二以外の三巻につきの巻末紙背識語がある。



(さし図2)

(卷三) 「」巻 「用紙廿三 丸」  
「廿廿未正」 「正月十九日」  
校「(さし図2)」

(卷四) 「二月廿八日」 「三月三日一校河」  
「正了但降隆削阿  
氣而」 「在甚」 「一校正了」

(卷五) 「二月卅日」 「三月三日一校」  
「二校正了」 「一校」

右の識語から、すでに若干の書写・校合関係事実がわかってくる。すなわち、卷三はもと用紙二三張で、某年正月十九日に一枚を了した。また「用紙廿三」の下の「丸□□」は経生の名の一部ではあるまいか。卷四は某年三月三日に校生河某が一枚を行なった。従ってそのさきの「二月廿八日」はおそらく書写月日であろう。卷五は「三月三日一枚」だからそのさきの「二月卅日」はこれも当然書写月日と思われる。また年月不明だが「二校正了」と校を重ねている。

ところで正倉院古文書に見える本経と同名のものの書写記録は、まえがき(例)の天平十四年の一切経々生手実継文に貼りつがれているつぎの一片である。

阿刀息人請<sup>一切</sup>經合式卷名謂過去現在因果經五卷 三卷  
「丸部石敷写料給了」  
(中略)

第四卷用紙廿二 五卷廿二

二月卅日 「勘人成説大伴」

(三八の二)

すなわち、阿刀息人が天平十四年二月に卷四、五を、他の三卷を丸部石敷がべつのところに書写したことを示している。石敷の書写年代はわからないが、右手実に「丸部石敷写料給了」と記入しているから、天平十四年二月以前であろう。天平十四年の一切経書写は、まえがき(例)の項にあるとおり二月に開始し、正月は未だ着手していなかったから、石敷の書写は十三年十二月以前ではなからうか。十三年の手実には該経書写のことは見えないが、同年中の手実は多くは断片的に塵芥文書に収められ

ている状態だから(まへがき)、あるいは亡失したとも考えられる。現存「経卷三の識語「丸□□」は丸部石敷、「正月十九日一枚□□」は天平十三年の後半期に彼が書写し、翌十四年正月十九日一枚とは見られないだろうか。十四年における書写の開始はさきに述べたとおり二月からだ

が、校合の方はたとえは該継文中に  
田辺正成解 申奉勘一切経事  
合卷佰拾式卷 用紙三千十七枚

(中略)

右、始正月一日迄三月廿九日 奉勘一切経用紙等 頭注如前 以解  
天平十四年三月廿九日田辺正成

(一八の六)

とあるように、前年書写のものについて正月から行なっていたのである。

つぎに阿刀息人の書写と思われる卷四・五は、手実によれば天平十四年二月の書写で、さきに卷四・五の識語にある「二月廿八日」と「二月卅日」を書写月日と推定したことは、だいたい正鵠を得ていたようである。最後に現存の四卷の筆蹟を見ると、卷二・三と、卷四・五はあきらかに別筆であって、右の推論を証拠立てている。図版ページのつごう上、全卷を掲げることができなかったが、図版19・20に示した卷三と卷五の部分は、前者が随所に向勢味をもつ点接のきびしい硬い謹筆、後者がやや軟かい扁平体の速筆で、彼此別人の書写にかかると明白である。(阿刀息人の筆蹟については図版35・36も併せ参照されたい。)

なお、卷四の識語にある「一校河（川ニモ作ル）」は当時の記録に頻出する校生河原人成であろう。

以上の資料より本経は

卷二 筆者・丸部石敷、書写・天平十三年

卷三 筆者・丸部石敷、書写・天平十三年、校合・天平十四年正月十

九日

卷四 筆者・阿刀息人、書写・天平十四年二月二十八日、校生・河原

人成、校合・天平十四年三月三日

卷五 筆者・阿刀息人、書写・天平十四年二月三十日、校合・天平十

四年三月三日

と考えた。ただし卷二、三の書写年代は推定の域を出ない。

31 修行道地経 一卷 卷四

完存。用紙二三張。識語なし。

本経と同名の経の書写記録は、5号の項に述べた塵芥文書卷一四の経

生手実（まゑがきの）に

達沙牛甘解 受経七卷之中（中）写了六卷未写一卷

（中略）

修行道地経見受三卷之中一卷先始（始）写了二卷第五卷（五）第四卷用紙廿

三十六枚秦惠万呂写  
三十七枚達沙牛甘写

（中略） 五月廿九日

と見える。これに基づけば、修行道地経卷四は、用紙二三張のうち一六張

を秦惠万呂が、また七張を達沙牛甘が書写している。現存経をひもとけば、図版21のように第一六・一七紙間を境に、左右あきらかに筆蹟の相違があらわれていて、現存の本経が右の手実（まゑがきの）にいうものであること決定的である。

図の右方の右肩上がりの速筆が秦惠万呂、左方のやや扁平で大ぶりな字が達沙牛甘の書写にかかる。

この手実は年代を逸しているが、これを含む一連の継文の裏に「五月経師等手実天平十三年」と墨書きがある。すなわち

筆者・はじめ一六張秦惠万呂、おわり七張達沙牛甘、書写・天平十三年五月

と判明した。

35 如来興顕経 四卷 卷一〜四

全卷完存。用紙は卷一・一七張、卷二・二二張、卷三・二二張、卷

四・二三張。識語は卷二の卷末紙背に「廿三日」の文字が見えるのみ。

全卷同筆。

五月一日経関係文書中に本経と同じ名の経の書写記録があらわれるのは、14号の項に掲げた続々修一帙所収天平十四年の経生手実である。14号の項と重複するが、その必要部分をいま一度掲げる。

葛野安麻呂受経十一卷（信力入印経五卷）一切法高王経一卷  
如来興顕経四卷（出家沙弥七十二法経一卷）

（中略）

如来興顕経第一用十七文一 二卷用廿一 三卷用廿一文一 四卷用廿

(中略)

天平十四年三月十九日 「勘人成 読川原」

(八の九、  
一〇〇)

右は張数がほとんど完全に現存経と合致するし、筆蹟もまた扁平な速筆で(図版8)、同じ手実にある一切法高王経と同名の現存経(図版9)、および葛野安麻呂のべつな手実にある仏説五百弟子自説本起経と同名の現存経(既述5号、図版7)と強い共通性がある、この手実がすなわち現存経に該当するものと考えられる。

なお、卷二の識語「廿三日」は、手実によつて本経の書写が三月上旬とわかつた以上、校合関係の日付けと見るべきであろう。

四巻とも

筆者・葛野安麻呂、書写・天平十四年三月

36 大樹緊那羅王所問経 四巻 卷一〜四

全巻完存。用紙は卷一・一九張、卷二・二二張、卷三・二〇張、卷

四・二〇張。全巻識語なし。全巻同筆。

この経と同名のものの記録を正倉院古文書に求めると、続々修二八帙所収裝潢本経充帳(「天平十四年七月廿四日充裝潢并本経充紙」と端裏書きがある。内容は、書写のために底本と料紙を経生に下附すること、および写了の経紙を造巻のため裝潢にあてる、二種のものからなつていて、大日本古文書のこの表題は不十分である)に

天平十四年七月廿四日(日脱之)  
禪院本経充

(中略)

大樹緊那羅王経四巻 淡海金弓  
用八十枚

淡海金弓

とあって、まず経生淡海金弓に底本四巻と料紙八十枚をあて、ついで

淡海金弓写経事

大樹緊那羅王所問経四巻 第一巻用十九張文 第三巻  
用十九張

第四巻用紙廿張文一

(中略)

天平十四年八月廿八日

(八の八一、続々修一帙所収一切経并  
疏経師等手実案帳、まゑがきのり)

と、同じ経生によつて書写された。

この手実にいう経と、同名現存経は、用紙数がほぼ完全に一致し、図版22・23に掲げたようにその筆風も、ともに細手右上りの奔放な筆致のうち、所々縦割のはなはだ太い字体をまじえ、全く同筆と見られ、両者の相即関係があきらかである。すなわちこの経は、四巻とも

底本充当・天平十四年七月、筆者・淡海金弓、書写・天平十四年八月  
である。

46 続高僧伝 一巻 卷三〇

巻首欠。用紙二四張。識語なし。

この経と同じ名の経の書写記録は、続々修一九帙所収手実継文中に  
調男屎受続高僧伝五巻 写二巻始一卷  
末写二巻

(中略)

第廿一卷廿二 六卷卅八 始二卷十九

(中略)

右起九月二日尽十二日受卷員并用紙注頭如件

(天平)

十一年九月卅日 「勘人成」

(七の三二九、  
まえがきのイ)

また

調雄蘇請合十七卷(男塚ニ同ジ) 統高僧伝五卷三帙 写九卷 未写八卷  
大周刊定目錄十二卷

受紙二百九十八張空一枚破一枚 遺七十九張

伝五卷受紙百冊張用百冊張 九月上番七十九張給竟十月上番五十一張  
反上十張更充大周目錄分

未給

第廿一卷用廿二 廿二卷用卅 廿七卷用廿四 廿八卷用十六

大周刊定目錄十二卷

(中略)

以前起今月一日 尺十五日 写目錄并伝請紙 注頭如右

「勘了」(天平十一年) 十月十五日 「勘人成」

(七の三三九、三四  
まえがきのイ)

以上二件がある。

また土師真木鳥校経帳(まえがきのイ)に、天平十一年九月の校合として

八日……又統高僧伝一卷卅八枚……十日……又統高僧伝(僧脱之)一卷廿二枚、又統

高僧伝一卷廿四枚……又統高僧伝一卷廿四枚

などに見えるのは右をうけるものである。

以上によって、調男屎(雄蘇)が天平十一年九、十月に統高僧伝第三帙(一帙に經十卷を納めるのがふつうである。従って第三帙は卷二一から卷三〇まで)中の数巻を書写し、それを土師真木鳥が校合したのである。

ところで現存の一卷は卷三〇で、右の手実に見あたらない。しかしのちに77号瑜伽師地論の項などで明らかのように、大部な經の書写には、だいたい一帙をひとりの筆者が担当していたようだから、本巻も同帙の数巻とともに調男屎の書写になったのではないかと一応の推測を下すことができる。この想定に立って本巻の筆蹟(図版24)を、べつな論拠からやはり男屎筆と考えられる114号大集経月藏分(後述)卷一(図版25)と比較すると、図に見るように「聞」の文字が全く同じ運筆であるほか、縦長の屈折多い共通の特徴をもっていて、同一筆であることが明瞭となった。

以上の事実から、本経は

筆者・調男屎

と判断した。書写年代は、同帙の僚巻が天平十一年九、十月であることのほか、知ることができなかった。

なお、続々修一九帙所収天平十二年經生手実(まえがきのニ)に、建部広足と一難宝郎による同名經書写のことが見える(七の四)が、巻次がわからな

い。47 聖善住意天子所問經 三卷 上、中、下

全卷完存。用紙は卷上・二二張、卷中・二三張、卷下・二四張。全巻識語なし。全卷同筆。

塵芥古文書卷二〇の經生手実に

建部広足 請写雜經三卷

受紙八十三枚反紙九 見用七十四枚

義足經上卷廿六 下卷 聖善天子經

天平十三年十一月廿

(七の五八八、  
七の  
まきがきの)

とあるものが、現存經にあたるのではなからうか。現存の三卷はみな同筆で、その筆蹟(図版26)を、建部広足の識語をもつ77号瑜伽師地論卷一八(後述、図版27)と比較すれば、どちらも扁平体でやや彎曲した右上りの同筆蹟である。従って右の手実に挙がっている「聖善天子經」は現存聖善住意天子所問經の略称で、建部広足書写のものと考えられよう。書写年代は、現存三卷中いずれかが手実の天平十三年十一月であるが、惜しいことに手実は卷次と張数の部分を亡なっている。

筆者・建部広足

49 出曜經 一卷 卷六

卷首欠。用紙二七張。卷末紙背に「出曜經六卷 □辺道主」と識語がある。

一応、現存經と同じ名の經の記録を掲げると、続々修二八帙所収装演本經充帳に

天平十四年七月廿四日禅院本經充

(中略)

出曜論上帙(マヤ)十卷 茨田久治上六卷用百七十五

下帙坂合文万呂更充九卷 山部充第十九卷 安刀第十七卷  
杖部十卷 第九卷漢 第廿六卷九部

(中略)

以四月十日充 (中略)

出曜經第八卷充古神徳用卅六張 (下略)

(八の一、一、  
一一五)

とあって、それぞれの經生に底本を充当した。それらの具体的な簡別書写事情は続々修一帙所収天平十四年の經生手実繼文(まきがきの)にある。それぞれの要点を示すと、

(1) 茨田久治万呂

請出曜經一帙写二卷未八卷 第一卷用廿八 第二卷用卅一張

天平十四年八月廿九日

(八の七九、  
八〇)

(2) 茨田久治万呂受出曜經上帙十卷四卷見写戻上四卷 又二卷八月写上 「第八房充

坂合部未了」

三卷卅五文空 四卷廿六文破 五卷廿四文破 六卷卅二文

天平十四年九月廿九日 「読田辺道主」

(八の  
九三)

(3) 古神徳受雜經七卷……出曜經第七卷廿八枚文

(天)十四年十一月卅日

(八の  
九六)

(4) 漢浄万呂受……

出曜經一帙九房用卅二

天平十四年十一月卅日

(八の九七、  
九八)

(5) 安刀息人請奉写一切經(文)陸卷二卷出曜經隨充写

……出曜經第一帙十卷廿三張文 第二帙九卷卅二張

(天)十四年十一月卅日

(八の  
九五)

(6) 韓国人成請一切経本合三卷 出曜経第二帙第十五卷

出曜経第十五卷用廿文

(天平十四年) 十一月廿九日

(一八の二)

(7) 古来小僧

……出曜経第十六用廿文

(天平十四年) 十一月卅日

(一八の九)

(8) 杖部子虫請奉写一切経論合十六卷

……出曜経第十七卷用卅七空一

天平十四年十一月卅日

(一八の九)

(9) 丸部石敷受写論三卷 出曜経二帙二卷

出曜第十八用紙卅六破一 第廿用紙廿四

天平十四年十一月廿九日

(一八の九)

右のうち(1)~(4)は上帙(巻一~巻一〇)、(6)~(9)は下帙(巻一一~巻二〇)の手実で、(5)は両帙に跨がる。

上件諸記録を要約すると、上帙一〇巻は茨田久治万呂に割りあてたが、彼は天平十四年八、九月に巻一~六を書写し(1)、(2)、残余の巻七~一〇を返上した(2)。そのうち巻七、九、一〇は、のち古神徳、漢浄万呂、安刀息人に一巻ずつ再充当し、どれも同年十一月に書写が終った(3)、(4)、(5)。残る巻八は(2)に示すとおり茨田久治万呂返上後、坂合部文万呂に再充当してなお未写であり、三転、古神徳に充当した(装潢本

経充帳」は出曜論と記しているが、それをうける手実はみな出曜経である)。

また下帙一〇巻は坂合部文万呂に充てたが、実際に書写したのは、韓国人成(第一五巻)、古来小僧(第一六巻)、杖部子虫(第一七巻)、丸部石敷(第一八巻、第二〇巻)、安刀息人(第一九巻)であった。残余の巻一一、一二、一三は手実がない。

さて現存の出曜経は巻六で、前掲手実についていえば(2)に該当する。現存経は巻首を欠いていて、手実と用紙数の比較はできないが、手実と書風で共通し、また識語の「□辺道主」は(2)の手実の名をとどめる校生田辺道主にちがいない。従って本経は(2)の手実にあるとおり筆者・茨田久治万呂、書写・天平十四年九月と見るのが至当であろう。

なお、以上のとおり天平十四年八月から同年十一月にかけて書写した出曜経二帙は

以十五年三月廿二日充

出曜論第一帙……十卷用三百十二張破四 第二帙……用百七十五枚

(中略)

右巻枚数取、三月廿二日充装潢秦大床勘如前

(装潢本経充帳、一八の一二四)

と、造巻にまわしたのであった。

51 毘邪婆問経 二巻 上、下

卷上は完存、用紙一九張。卷下は巻首欠、用紙一四張。二巻とも同筆。巻上につきぎの巻末紙背識語がある。

〔 〕年四月 雀マ(部) 十三日 一枝河〔 〕 (さし図3)



(さし図3)

すなわち、めずらしくも識語によつて経生名の知られるものひとつである。

「雀マ」は、経生雀部鳥足のこと、先述した19号泥犁経(図版12)と本経の筆蹟(図版13)は全く共通の尖鋭な筆づかいを示している。

これに該当する手実は、続々修一帙所収、天平十四年二月から五月、および六月から十一月の一切経書写手実継文(まえがき)の(㉟)、(㊱)に載っていて

(1)雀部嶋足 請写雜経三卷「納了四月」

(中略)

毗耶沙門経上卷用十九 (中略)

(天平十四卷)

五月卅日 「勘人成」

(八の五九、六〇)

(2)雀部嶋足 写毗耶沙門経下卷用廿

受紙廿張 見用廿張

(八七)  
十四年三月廿九日 「誦川原勘人成」

(一八〇)

右の二件である。

卷下は首部を逸するから、手実(2)と用紙数を較べることができないが、巻上と(1)の用紙数は合致する。また識語中の「一枝河〔 〕」は(2)の手実中の「誦川原」にあたるものである。

また、手実(1)の日付けが五月で、識語の「〔 〕年四月」と合わないようだが、(1)中には別筆で「納了四月」と書き入れがあり、実際には識語どおり四月に書写を完了したのであろう。

なお、続々修二八帙所収装潢本経充帳には、天平十四年八月十八日、装潢秦大床に充てた未造了経中に

十月一日題了  
毗耶沙門経下卷用廿

(一八一)

とあって、書写後の造卷、題書までの経過がわかる。

筆者・上下とも雀部鳥足、書写・上巻は天平十四年四月、下巻は同年

三月

56 別訳雜阿含経 六卷 卷一、二、四、六、七、九

全卷完存。用紙は卷一・二四張、卷二・二二張、卷四・二四張、卷六・二二張、卷七・一三張、卷九・二四張。全卷同筆。識語なし。(右のうち卷四は、現在54号雜阿含経中に編入されていて、将来改組を要する。)

さて例によって正倉院古文書中から現在経と同名のものの書写記録をさがすと、続々修一帙所収写一切経々生手実継文(まえがき)中にあって

(1) 鯨<sup>(角)</sup>惠麻呂請写雜經惣十六卷之中写了十五卷未写一卷

(中略)

別訳雜阿含經合八卷見写七卷未写一卷 一卷廿四 二卷廿一文一 四卷廿四

六卷廿二 九卷廿四 八卷十七文一 十卷十六文

天平十四年三月廿八日

(八の六)

(2) 角惠麻呂四月内請写經合九卷別訳雜阿含經合八卷七卷三月受写了 一卷四月写 広博敵浄経六卷 漸備経二卷

(中略)

別訳雜阿含經七卷十三空一 漸備一切智徳経四卷十四 一卷廿四文一

広博敵浄経一卷十五文一 二卷十六文一 四卷十四 三卷十八文一 六卷

十七文一 五卷十五

天平十四年四月廿九日

(八の一四)

と見える。

右の手実という各巻の用紙数は現存経のものと全く合致するし、さらに手実(2)に併記している漸備一切智徳経、広博敵浄経と同名の経が残つていて(84・119号、後述)、それらの筆蹟(図版32、84号のもの)と、現存の別訳雜阿含経の筆蹟(図版31)がともに著しく右上りで酷似している点より考えて、右の二種の手実が、どれも現存別訳雜阿含経の書写記録であることは容易に察せられよう。すなわち

筆者・角惠万呂、書写・巻七のみ天平十四年四月、他はみな同年三月である。

なお聖語藏に現存しない僚巻の書写に關しても、まえがきの(夕)、(イ)の手実継文中に記事があつて、巻一一、一二、一三、一七、一八、一九は

天平十四年五月に戸令貴が、また巻一六は同年八月に杖部子虫が書写している(八の五六、八の八四)。

また全く手実に見えない巻三、五、一四、一五、二〇の五巻は、天平十四年十月二十二日の高屋赤麻呂欠経目録(八の一三二)に

別訳雜阿含経欠五巻

とあるものに当るのではなからうか。

61 諸法本無経 二巻 上、下

二巻とも完存。用紙は上巻・一四張、下巻・二一張。二巻とも同筆。

識語は下巻の巻末紙背に「用紙廿一張□□」と見えるのみ。

正倉院古文書では、天平十四年七月にはじまる装潢本経充張に

諸法本无経三巻樸井册七

(八の一三)

とあるのがまず目に映るが、同年十月廿二日の高屋赤麻呂欠経目録に諸法本无経上巻が挙がっているから(八の一三一)、全巻の写了はその日以後に求めねばならない。はたして続々修一帙所収一切経并疏経師等手実案帳(まがきの(イ))に

樸井馬養 受雜経論十九巻

本无経上巻十四 中巻十二 下巻廿一

(中略)

阿毗曇毗婆沙論第七帙第一卷十九文一 第二卷十三 第三卷十三 第四卷十二

第五卷<sup>十五</sup> 第六卷<sup>十五文一</sup> 第七卷<sup>十三</sup> 第八卷<sup>十三</sup> 第九卷<sup>十八</sup>  
(鉄腕<sup>之</sup>十八文一)  
 第七十卷<sup>破一</sup>

(中略)

天平十四年十一月卅日

(八の)  
 一〇〇〇

と、その書写のことがあらわれる。

本手実の本无経用紙の総数は四七張で、裝潢本経充帳のものと同致し、また上下二巻の張数は、それぞれ現存同名経のものとまた一致している。さらにまた、右の手実にはやはり櫛井馬養の書写分として挙がっている阿毗曇毗婆沙論第七帙第三巻(すなわち卷六三)と同名の現存経(103号、後述)の筆蹟と、現存諸法本无経の筆蹟(図版33・34)を照合すれば、どちらもやや右上りに彎曲した扁平柔軟な筆で、あきらかに同一人の筆であると考えられる。

以上をもって現存経と手実の一致が判明した。すなわち本経は、二巻とも筆者・櫛井馬養・書写・天平十四年十一月

と思考する。

62 法句譬喻経 四巻 卷一〜四

全巻完存。用紙は卷一・二五張、卷二・二七張、卷三・二九張、卷四・三二張。全巻同筆。巻末紙背識語は卷一、二、四にあり、うち卷二の識語は経生の名がみえる。各識語はつぎのとおり。

(卷一) 「五 破一」 「文一」 「正了」 「十三日二校民七万呂字一

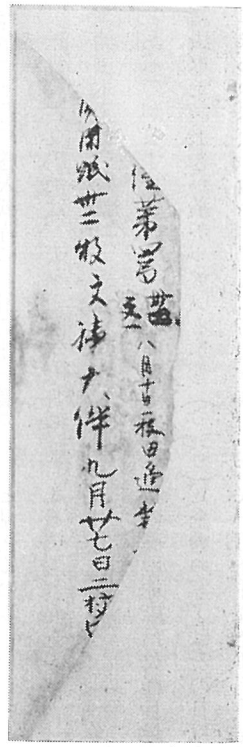
誤」

(卷二) 「七」 「十四年八月廿二日息人」 「八月廿三日一校田辺」

「校廿七枚読大伴」 「二校河成末」

(卷四) 「経第四写<sup>廿二</sup>」 「八月十日一校田辺」 「充用紙卅二枚文

「読大伴」 「九月廿七日二校」 (さし図4)



(さし図4)

卷二の識語中「十四年八月廿二日息人」とあるのが経生識語で、天平十四年八月廿二日阿刀息人の書写であることを示す。本経の筆蹟(図版35)が同じ息人の識語をもつ93号阿毘達磨順正理論卷二六(図版36、後述)、過去現在因果経卷五(図版20、既述)と同じであることがそれを証明している。

このように本経は、すでに識語によって筆者、書写年代のわかるものがあるが、なお正倉院古文書にそれらの具体的書写記録を求めると、天平十四年の裝潢本経充帳に、阿刀息人に充てた禅院の底本として

「法句譬喻経四巻<sup>阿刀</sup>百十三 破一」

があり、その経生名、用紙数とも現存経に合致する。さらに実際の書写

(八の)  
 一一一

に關しては、続々修一帙所収天平十四年一切経々生手実継文(まゑがきのひ)に

阿刀息人写一切経合六卷法句譬喻經四卷

(中略)

法句譬喻經第一卷廿五破一文 二廿七 三廿九 四卅二

(中略)

(天平)  
十四年八月廿九日

(七八の)

と詳記されている。(この手実の日付けと卷二の識語の日付けとのあいだに相違があるが、識語は実際の書写完了日を示し、手実は八月下番の総書写経を月末に一括報告しているのである。)

卷二、四の識語にある「田辺」「大伴」「河成」はすべて校生で、当時の諸記録に散見される田辺当成(または道主)、大伴吉人、および河原人成の略称であろう。

以上、識語と手実の総合によって得た結果は

筆者・全卷阿刀息人、書写・卷二は天平十四年八月二十二日、その他も同年同月中、校生・民七万呂、田辺当成(または道主)、大伴吉人、河原人成ら、校合・卷二は八月二十三日一校、卷四は八月十日一校、九月二十七日再校

である。卷二のように書写後直ちに校合したのもあれば、卷四のごとく一校、二校の間に一ヶ月以上も空白期をへだてるものもあって、当時の写経の経緯を知る上に興味もたれる。

なお、この一群の経は

法句譬喻經四卷用百十三破一

(中略)

合充経百六卷用紙二千二百五十九 空七破十八

右経 (天平十四年)  
以十月四日 充秦大床勘如前

同日記充 韓国人成

川原人成

(八の二〇、一二一、裝潢本経充帳)

のように、天平十四年十月四日、造経のため裝潢秦大床にひきつがれた。

63 宝雨経 四卷 卷二、五、八、一〇

卷二は巻首欠、その他は完存。用紙は卷二・一六張、卷五・一九張、卷八・一八張、卷一〇・一八張。全巻同筆。識語なし。

右四巻のうち卷二は121号として別出しているが、みな僚巻であって、将来聖語蔵経巻目録を改組しなければならない。

本経と同じ名の経の書写記録を正倉院古文書に求めると、天平十四年七月、禅院の底本充当のことがある(裝潢本経充帳、八の一・二)。すなわち

宝雨経五卷充建部広足用九十二枚

ついで続々修一帙所収一切経々生手実(まゑがきのひ)に

建部広足 請雜経十八卷既写了

(中略)

宝雨経五卷 第二十八文一 第五十九文一 第八十八文一 第九十九文一

(中略)

天平十四年九月卅日 「読道主 勘人成」

(八の九二、九三)

とその書写のことがある。

この手実の各巻の用紙合計数は、本経充帳の用紙数に合い、また現存経各巻のそれとも合致する(巻二は巻首が欠けているから除外せねばならない)。さらにまた、図版27・28に示したように本経の筆蹟と、建部広足の識語をもつ77号瑜伽師地論卷一八(後述)の筆蹟は、全く等しい扁平右上りの彎曲体の軟筆である。以上の事実より先掲本経充帳の記事、手実、及び現存経が、すべて一条の線上にあることは明白であろう。すなわちこの経は

筆者・建部広足、書写・天平十四年九月

である。

なお、続々修一六帙四巻に収める写経所文書に

奉還本経 合卅五巻

雑咒十巻欠第九 起世経十巻 宝雨経五巻第二、五、八、九、十、合五

巻

(中略)

天平十五年三月三日 「古庵智」

(八の一六六、一六七)

と、借り出し先に返納された宝雨経は、あるいは現存経の底本ではなかったらうか。

ちなみに宝雨経は一〇巻本だが、当時五巻しか伝来しておらず、天平

勝宝六年、残部が入唐廻使によつて伝えられ、始めて完本となつた。

すなわち

奉写一切経所解 申後写加経事

合大小乘経論賢聖集別生并目錄外経惣一百七巻 (中略) 宝雨経五巻

第一三四六七

(中略)

以前経論 並是旧元来无本 去天平勝宝六年入唐廻使所請来 今從内

堂請 奉写加如前 謹解

天平宝字五年三月廿二日 史生下道朝臣

外從五位下行大外記兼坤宮小疏池原公

造東大寺司主典安都宿弥

66 菩薩行方便境界神通變化経 二巻 卷二、三

(続々修三帙四巻、四の四九六、四九九)

二巻とも完存。用紙は卷二・二一張、卷三・一八張。卷二の巻末紙背に「用廿一張 □月誤即二校正了」と識語がある。

本経と同じ名の経の正倉院古文書にあらわれるものは、天平十四年七月の本経充帳に

芽行方便境界神通變化経二、三充大石 用卅八空一

(続々修二帙三巻 八の一、一二)

と、まず見えるものを受けて、続々修一帙所収天平十四年六月から十一月の一切経々生手実継文中につきの二種の手実がある。

(1)大石広麻呂請写一切経合七巻

(中略)

芽行方便経第三巻十八空一 又第三巻廿一枚

(中略)

天平十四年八月廿九日 「読田辺 勘人成」

(八の八三)

(2)大石広万呂謹啓

請毗婆娑論第二帙九卷

第八  
写七卷用紙十六 菩薩行方便神通變化經第三

卷用紙廿一枚

(中略)

(天平十四年) 十二月二日 「勘人成」

(八の二〇一、二〇二)

現存經の筆蹟と大石広万呂のべつな手実(図版37・38)を比較すると、図に見るように、ともに右上りの細い扁平体で、だいたい合致するようである。その点、本経が大石広万呂の書写であることは推察が可能である。また手実(1)の「第三卷十八空一」と「第三卷廿枚」も、現存經の張数と同じである。そしてその二卷は、本経充帳のべつなところに

十一日了  
菩薩行方便境界經二卷用卅八

(中略)

右經以十月四日 充奏大床 勘如前

(八の二二一)

とあって、天平十四年十月四日、造卷にまわされている。しかるに手実(2)にあるように、同年十一月末(手実の日付けは、おおむね一箇月を上下両番にわけ、月半ばまたは月末に各番の書写内容をまとめて報告する。手実(2)のように月はじめの日付をもつものは珍しいが、その内容は右の例のように十一月下番の業績報告であろう)に再び同一人物によって同経卷三の書写が行われているのは奇妙である。しかもその紙数は現

存経卷三と一致しない。天平十四年十月二十二日付けの欠経目録に「薩善行方便境界神通變化經上卷」が挙がっているから、あるいはその年十一月下番に欠本の補写が再び大石広万呂によって行われ、これを手実(2)に誤って卷三と記したとでも解しようか、後考を要する。

以上、手実(2)は現存経に合わず、手実(1)が本経の書写記録であると見られる。すなわち二卷とも、

筆者・大石広万呂、書写・天平十四年八月

69 度世品經 一卷 卷四

完存。用紙二六張。識語なし。

本経と同じ名の経の書写記録を正倉院古文書に求めると、続々修一帙

所収天平十四年の經生手実繼文(まえば)に

漢浄万呂合受経卷 度世經六卷二卷三月了  
四卷四月了

(中略)

度世經三帙廿四 四卷 廿五枚破一 五卷廿五枚 六卷廿四文一 (中略)

天平十四年 四十九日

(八の二四一)

という一文がある。現存経の筆蹟(図版16)は縦長のまことに個性に充ちた峻険な筆風で、98号舍利弗阿毘曇非分界品卷三(図版15)その他のごとく識語によつて漢浄万呂の書写と判明している諸卷(いずれも後述)と全く同筆である。従つて本経もまた漢浄万呂の書写にかかり、前記手実の「度世經……四卷 廿五破一」は、現存経と張数も一致するから、本経の手実と断ぜられる。

すなわち

筆者・漢浄万呂、書写・天平十四年四月

である。

なお、右の手実<sup>(八の)</sup>に付記してある三月写了の二卷(卷一、二)についても、同じ継文中に手実<sup>(七の)</sup>があり、やはり漢浄万呂の書写である。

70 道神足无極变化経 一卷 卷上

完存。用紙二七張。識語なし。

本経(卷上)と同じ卷次の経の書写記録は正倉院文書に見えないが、卷下について、ま<sup>(八の)</sup>えがき(し)の手実継文につきの記録がある。

杖部子虫受一切経本七卷 写了三卷未写四卷

受紙七十九張返上一現用七十八張之中文二 道神足无極变化経下卷用廿九

文一

(中略)

天平十四年八月廿九日 「誦川原勘人成」 「川原人成」 (八の八四)

これによって、卷下が杖部子虫の書写になることがわかるが、いま右の手実(図版40)を、現存経卷上の筆蹟(図版39)と照合すれば、どちらもやや柔軟な<sup>(八の)</sup>すれの<sup>(七の)</sup>ない筆致で共通の感があるように見受けられる。このような小部の経では、同一の経生が全部を書写することが普通だから、現存の卷上も一応、杖部子虫の書写と考えてよいのではなからうか。すなわち

筆者・杖部子虫

と推定。書写年代は不明。

以上、第1号から70号までの間に、二五項、五四卷の筆者、書写年代等を検討した。第71号から最後の126号までについては、後日、稿をあらためて発表し、併せて結論に及びたいと考えている。

### 図版目次

- 1 阿鵬阿那含経(志紀久比麻呂筆蹟)
- 2 志紀久比麻呂手実
- 3 沙葛比丘功德経(戸令貴筆蹟)
- 4 大魚事経(同 右)
- 5 諫王経(大日佐安麻呂筆蹟)
- 6 大日佐安麻呂手実
- 7 五百弟子自説本起経(葛野安万呂筆蹟)
- 8 如来興顯経(同 右)
- 9 一切法高王経(同 右)
- 10 字経(志紀人成筆蹟)
- 11 志紀人成手実
- 12 泥犁経(雀部島足筆蹟)
- 13 毘邪婆問経(同 右)
- 14 禪秘要経(漢浄万呂筆蹟)

- 15 舍利弗阿毘曇非分界品(同 右)
- 16 度世品經(同 右)
- 17 阿闍世王經(吳原生人筆蹟)
- 18 吳原生人手実
- 19 過去現在因果經卷三(丸部石敷筆蹟)
- 20 同 卷五(阿刀息人筆蹟)
- 21 修行道地經(秦惠万呂右・達沙牛甘筆蹟)
- 22 大樹緊那羅王所問經(淡海金弓筆蹟)
- 23 淡海金弓手実
- 24 統高僧伝(調男屎筆蹟)
- 25 大集經月藏分(同 右)
- 26 聖善住意天子所問經(建部広足筆蹟)
- 27 瑜伽師地論卷一八(同 右)
- 28 宝雨經(同 右)
- 29 出曜經(茨田久治万呂筆蹟)
- 30 茨田久治万呂手実
- 31 別訳雜阿含經(角惠万呂筆蹟)
- 32 漸備一切智德經(同 右)
- 33 阿毘曇毗婆娑論卷六三(樺井馬養筆蹟)
- 34 諸法本無經(同 右)
- 35 法句譬喻經(阿刀息人筆蹟)
- 36 阿毘達磨順正理論卷二六(同 右)
- 37 菩薩行方便境界神通變化經(大石広麻呂筆蹟)
- 38 大石広麻呂手実
- 39 道神足無極變化經(杖部子虫(?)筆蹟)
- 40 杖部子虫手実

計佛言善哉善哉已過去佛无有過是四事  
 未來佛亦无有過是四事今現在佛亦无有  
 過是四事佛為阿耨阿耨阿耨阿耨阿耨阿耨  
 喜而退呵騰阿那鎔還歸入舍呼諸人容奴  
 輝坐者前好為說經開解語生死善惡之道

(1)

志化此所請雜經六卷  
 不退轉經一卷  
 受戒百十七枚  
 不退轉經一卷  
 受戒百十七枚  
 不退轉經一卷  
 受戒百十七枚

(2)

龍室龍即出比丘復出龍入比丘復入如是  
 龍室龍即出比丘復出龍入比丘復入如是  
 龍室龍即出比丘復出龍入比丘復入如是  
 龍室龍即出比丘復出龍入比丘復入如是

(3)

窟非我兒八時小魚盡為魚師所捕舉著  
 岸上如是小魚大魚有死者此亦如是或有  
 一此二在化聚落遊行著衣持鉢同行乞食  
 福度衆生不守護身不守護口意不具足者

(4)

節度臣民歎德四海歸心天龍鬼神皆聞王  
 善死得上天後亦無悔王無好姪姪以自荒  
 悔无以忿意有所殘賊當受中臣剛真之諫  
 夫與人言常以寬詳无均執之當以四意侍  
 於國民何謂為四隨時藥與和意典語所有

(5)

大日信安麻呂  
 受本任三局阿舍行任  
 凍王信安麻呂  
 受本任三局阿舍行任

(6)

善道也。有科。指之。積。指。于。聖。道。之。以。其。善。而。居。宮。館。寶。殿。五。河。之。原。則。典。攬。焉。有。八。味。水。池。華。殖。七。色。服。此。水。者。即。識。宿。命。於。時。龍。王。請。佛。世。尊。及。五。百。上。首。弟子。進。饌。畢。訖。坐。蓮。華。上。追。講。本。起。所。造。罪。福。皆。由。纖。微。轉。受。報。應。弥。劫。歷。紀。莫。能。自。濟。僥。值。正。覺。乃。得。度。

(7)

聞如是一時佛遊如來建立之玉号歎法身深奧悅豫普見祥閣為大嚴淨顯曜威官統痛之藏如來所行佛時興出无量之路為法界官觀菩薩身光明清淨師子之坐咸受一切菩薩之體為大法坐皆法界如來聖旨

(8)

林與大比丘眾一千二百五十人俱其先悉是辨髮梵志其名曰優樓頻螺迦葉等一切皆是大阿羅漢諸漏已盡无復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫人中太龍應住

(9)

窮人呼給粥糶氏領達慈善佛起精舍行地唯祇園好同從請買太子祇言能金側布其地今聞無空便持相與須達隨實數祇曰我鐵言可語之紛紛國老以許貢使不宜復悔遂聽與之須達哩公金足祇謂其悔嫌貴自止不賣也自今

(10)

志紀人氏請大般若經為四快  
受飲八十二張  
見圖紙八十二張  
第二日廿  
第七廿二張

(11)

意盜竊喜犯他家婦女喜欺人喜兩舌喜惡口喜妄言喜嫉妬喜慳貪不信有佛不信有姓不信所作因有殃福不信有後世生今我死當入淫孽是為身者佛言設令惡人眼如我眼見惡人所趣殃過考掠之憂惡人即怖

(12)

天无痛苦身有善香著妙天衣色相殊妙天  
華嚴身於宮殿中次第漸行彼裏見有梵王  
天女見天童子一切悉來圍遶而住住如是  
言聖子善來善來聖子此浴室殿我无夫主  
久離夫主獨有童子我今色少妙色具足應

(13)

色者以濁水洗皮如是衆多漸漸廣大滿一  
由旬想一由旬已想二由旬想二由旬已漸漸  
廣大想百由旬想百由旬已乃至見三千  
大千世界滿中赤色骨或有所涇色者或  
有濁水色者以濁水洗皮固迎上下縱橫弥

(14)

言正身正命正身進正身階是若得入色  
去何四大地大水大火大風大是若四大去  
何四大所造色眼耳鼻舌身色聲香味身  
口非我無教有漏身口或無教有漏身進有  
漏身除正語正業正命正身進正身除是  
若四大所造色去何可見有對色色入是若

(15)

何謂志性何謂性和何謂應時何謂應信何  
謂信入世界何謂信入衆生界何謂居正何  
謂典發何謂奉行何謂成就何謂失佛道法  
何謂身然何謂究竟法何謂生佛法何謂正  
士何謂為路何謂路無量何謂道業何謂行  
道可謂是道可謂為道可謂為道可謂為道

(16)

得无所從生法而得如是三昧慧悉得知一切  
人心之所行如所欲以法教令各得其所諸  
四天王及天帝釋釋天及諸天子龍闍叉捷  
隨羅阿須輪迦留羅真隨羅摩休勒人非人  
悉來會時文殊師利在山一面異處與廿五  
二其可謂士二其可謂士二其可謂士二其可謂士

(17)

吳原生之謹申  
寫生經五卷  
四卷去年幸國(或寫)  
第一卷當年生(或寫)  
受戒卅枚 區上十三枚 見用廿七枚

(18)

波提及耶輸陀羅言車匿雅與捷陟俱還關  
此言已就轉于地而自念曰今者雅聞車匿  
捷陟相隨俱還而不聞道太子歸精摩訶波  
闍波提即是言我養太子至年長七一旦

(19)

心自思惟彼道十... 為長遠而此沙門乃  
能俄余已得注還神通變化殊自正疾然故  
不如我道真也迦葉即便下種種食佛即呪

(20)

山崩若火起 是謂為外空  
其備行者諦觀如是而身內空尚非香所  
况復小空而云我乎執心專精內外諸空等无  
有異所以者何无有苦樂故也不可捉持无  
有想念已无心意无有苦樂不當計我於  
是頌曰  
是身中之空 計體了无我 何況於外空  
當復計有那 察於内外空 悉等无差異

(21)

無尋辯才進入念慧慙愧具足其志堅固猶  
如金剛善備成就一切佛法志意清淨成就  
具足自不忘失菩提之心亦能令他而不志  
失善調柔施攝伏者根善能知捨所愛之物

(22)

法海會寫經事 大樹陰那羅王所問經四卷  
第四卷用紙十張 天明羅刹經第一卷  
用紙十張第二卷用紙十  
張第三卷用紙十張  
今寫經數六卷用紙一百四十四張之中又五張

(23)

唐京師法海寺釋寶嚴傳十二  
釋志明下... 人變儀象胡故世以胡明為  
目然其利口奇辯鋒涌難加攝體風雲日  
時事生言驚世聞言... 採經論傳  
尋書史据撥大拍不存文句陳之御世多營  
齊富氏百風芝其列卷寶嚴以月涉行書物

(24)

大集經月藏分第十二初品

如是我聞一時佛在住維帝山牟尼諸仙所  
衣住處與大比丘眾百學無量六百万人於  
諸煩惱堅牢纏縛悉得解脫離苦海不  
習氣及諸菩薩摩訶薩眾无量无边不可算

(25)

菩薩實意菩薩實印

任常登手

縮手菩薩常精進菩薩度眾生菩薩增上精  
進菩薩如說能行菩薩精進願菩薩手燈香  
薩等心菩薩捨罪菩薩除諸悲闍菩薩力不  
壞菩薩口藏菩薩金剛遊步菩薩无邊遊步

(26)

由此因緣世尊自顯雅我獨為真弊尊者故  
為彼天作如是說具足具慧以自熏脩又唯  
世尊能為四種殊上類生宣說出離一切眾  
苦聖八交道此中世尊亦自顯示是真說者  
云何具足謂佛世尊昔菩薩時棄上妙欲捨

(27)

首能才和着等中至如月... 若言亦不  
福田故不散施故終不耽着生於愛深亦不  
為己執我我所受之物與一切有情共  
之迴施一切苦惱之者由此因緣菩薩所  
得利養等事終不倚恃而生我慢負高之  
心作是思惟所得名聞利養等事體性空  
寂都不可得終當磨滅敗壞之法不可信

(28)

殖善本於來世是故說曰非義未設權也推  
慧致大義者云何興善之識從事教人正見  
不順耶華之液不留外道異術承受其義而  
謂義者無漏慧義禪義觀義是故說曰推慧  
致大義也自致第一尊者諸佛世尊奉持禁  
戒不放逸人執心牢固不入耶聚恒以禁戒  
訓誨眾生常求三業是故說曰自致第一尊

(29)

苦田久治下受出曜性上快十卷  
受抵百廿五枚  
四卷見寫了  
空一破一  
見用百十六枚  
五二  
四卷廿六德五卷廿四德六卷廿二

(30)

如是我聞一時佛在祇絺羅國菴婆羅園余  
時尊者善生初始出家剃除鬚髮未詣佛所  
頂礼佛足在一面坐佛告諸比丘此族姓子  
善生有二種端嚴一空狼躡障天姿捷特二  
能剃除鬚髮身服法衣深信佛法會歸无常

(31)

諸菩薩等不可思議法光聖首任明智地多  
所塵脫攝取一切衆德之本皆晚諸佛本所  
行成慙念十方解了善摧敷演道化善和法  
慧周流十方所講經誼盡令堅住其智慧明  
无能毀者隨時達五念使得安超諸世間不  
肯方谷至此青爭至嚴善不入不可議慧之

(32)

居士名言世尊所說四攝法有初愛語求益  
同事以此四法攝眷屬亦知已攝眷屬彼作  
是說居士眷屬及與攝法各各別異而能相  
攝是故知攝他法不攝自法餘雖復說正見  
正方便正覺是慧身所攝正念正定是定身  
所攝彼作是說正見是慧慧身所攝正定定  
身所攝可令正覺正方便非慧性正念非定

(33)

佛說諸法本无經卷上  
復次婆伽婆遊於王舍鷲聚山中與大比丘  
衆五百人俱菩薩九万二千所謂莊嚴瑩飾  
菩薩摩訶薩師子遊出菩薩摩訶薩无礙炎  
淨光德威王菩薩摩訶薩迷留山頂音王菩  
薩摩訶薩愛咲无垢光菩薩摩訶薩出  
日月光菩薩摩訶薩寂勝无垢持冠菩薩摩

(34)

可於是齋身行到佛所時佛在耆闍崛山石  
室中坐禪入普濟三昧天帝見佛誓首作禮  
伏地至心三自歸命佛法聖眾未起之間其  
命忽出便至窠家驢母腹中作子時驢自解  
走凡坏間破壞坏器其主打之尋時傷胎其  
神即還入故身中五德是備復為天帝佛三

(35)

无表計假三不善明在欲 无表遍欲色 表唯有信二  
欲无有實表以无芽起故  
論曰无表唯道善不善性无有无記所以者  
何是强力心所等起故无記心者无有功能  
為目等起引强力業令於後後餘心位中及  
无心時亦恒續起所言餘者謂二表及思三

(36)

有是慶文殊師利當知若見此佛刹主外道  
出家汝善男子當知一切安住一道所謂佛道  
文殊師利喻諸禽獸无力能任師子王前如  
是文殊師利諸外道出家无能侵入如来境  
界亦不能與如来競論大人師子持於十力

(37)

大石廣百呂受寫經合五卷 仁說力士移山經一  
說七知任一卷 用紙三張 不日守意任用紙二張  
仁說梵天波羅延閻種尊經用紙八張 請紙合

(33)

聞如是一時佛遊於切利天上在巴質樹下  
紺流離石佛坐其上為母說法盡夏三月與  
大比丘僧眾俱比丘八千皆得羅漢諸垢已  
索神足備具能在所作為菩薩七方二千人  
神通已達皆得陀鄰屋悉知一切人心之所  
行所欲自在遍至諸无鞅數佛刹時佛與无

(39)

村平帝請寫法華經具前六快八卷 現用二百廿七張  
先乘雜十三快慶諸仁境界智先嚴經 用廿  
合二百卅七 廿張麻 余三枚

(40)